

安楽寺寺報

開光

二つの自然
くしぜんとうじねん

七月六日、西日本各地で大雨による豪雨災害が発生しました。今までにない豪雨で、呉におきましても、土砂災害により二〇名以上の死者が出ました。被災されました方には心よりお見舞い申し上げます。

まさか呉でこんな災害が起こるとは思いもせませんでした。その後は断水となり、各ご家庭でも不自由をされたことと思います。呉線の不通に加え、呉に通ずる道が全て寸断され、通行止めとなりました。呉はまさしく陸の孤島とかし、流通がストップし、飲食物もガソリンも不足し、市民は不自由と不安の中で数日間を過ごしたことです。特に断水は普段何気なく使っている水ですが、水道から出る水がどれほど有難いものか

信楽晃仁

第88号
歓喜会号
2018/8/1

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

実感いたしました。また下の写真の通り、自然の前では家も車も、人間の作ったものは全く役には立ちません。人間の非力を実感したことです。

東日本大震災から七年がたちますが、近年、頻りに地震、大雨、台風といった自然災害が日本各地で発生しています。また現在の四〇度を超える猛暑も災害と言われます。

地球環境の変化とは申しませんが、その原因の一つには私たち人間のエゴによりもたらされた環境問題、地球温暖化も大きく関わっていると思えます。人間がわがもの顔で、自然のことを考えることなく、快適性や利便性ばかりを追い求めることにより、自然が狂ってきている一面がありま



長野の被災現場

す。私たちは今一度自然のとらえ方を見直すべきだと思います。

現代人は自然と人間を切り離して考えているように思います。しかし東洋の思想、そして仏教はその自然を深く我が身に受け止めてきました。

『涅槃経』には「草木国土悉皆成仏」という言葉が見られます。草も木も国土も成仏するというのがこの話です。また滴水禪師のお話は前任職が「信楽峻鷹遺稿法語集」(二二頁)「一滴の水のいのちに気づく中で、仏教の神髄に触れたと滴水禪師はおっしゃいます。一休さんの辞世の句に

「借用申す昨月昨日。返済申す今日。かりおきし五つものを四つかえし、本来空にいまどもとづく」という句があります。昨月昨日とは、生まれた日、その時に借りたものがあるとされます。それを今月今日とは、命終の日です。近々いのち終わる時に借りたものをお返しします

と、言われます。その借りたものは五つだが、その中の四つ返して、本来の私に帰らせてもらいますと云うものです。その五つものとは、仏教では五大、五輪と言われ「地水火風空」のことです。その前四つを返して、最後の空に帰るといいます。地と水と火と風、これは万物を構成する要素を表します。自然の根本です。しかし実は人間も同じものだというのです。地は土です。私たちの身体は土とは違うと思っています。汚いからとどろんこ遊びをする子ども達を土から引き離そうとしますが、人間はいずれ土に帰るのです。死んでほつとけば、自然と土になるのです。次に水です。元々人間の身体約七〇%が水です。年齢を重ねると減少し高齢者は六〇%位まで下がります。しかし、それでも半分以上が水です。しわが増えたり、かさかさになるのも領けます。身体の中の水分量が減っているのです。私たちが生きていけると言うことは、少なくとも身体半分以上の水と共にあると云うことです。今年には熱中症が多発して

安楽寺本堂にて結婚式

7月28日安楽寺本堂にて、結婚式がありました。新郎の辰己君は空手をご縁で、仏法に興味を持ち、今年6月にとうとう得度までして僧侶になりました。是非安楽寺の本堂で結婚の奉告をしたいとのことで、この日挙式となりました。今後とも共にお念仏の道を歩んで参りたいと思います。もしお近くに結婚前のカップルがおられましたら、仏前結婚式をお勧め下さい。



安楽寺本堂修復開始

皆様大変ご無理を申しましたが、たくさんの皆様のご協力を頂き、本堂工事に入れます。まことにありがとうございました。

7月の豪雨災害があり、一時は工期を再検討した時期もありましたが、一週間ほど遅れてのスタートなら可能と言うことで、8月1日から着工いたしました。しかし一難去ってまた一難で、新たな心配はこの猛暑です。足場の職人さん達も汗だくになって働いていましたが、熱中症が心配です。この猛暑の中感動したのは、このお兄さん達の挨拶と動きと職人技です。若いお兄ちゃん達なのですが、本当に礼儀正しく、テキパキと動く姿、そしてパイプを2階まで投げ上げる技には感心しました。今後厳しくなる猛暑の中で、どうか皆体に気をつけて作業に当たって頂きたいと思ひます。8月中の工事完了は難しくなりましたが皆様のご協力を頂き無事完了したいと思います。宜しくお願ひいたします。

編纂後記
この度はやはり皆、豪雨災害に目が向いており、記事がふつてしまいましたが、それぞれ受け止めというところで、各々お祈り下さい。辰己君の結婚式では司婚を、披露宴では乾杯の首領を頼まりました。式ではホテルからついでに、係の方、私(晃)の数年前のひかり幼稚園の卒園生です。ここに来ることを楽しみにしていたとお話頂き、結婚式前に新郎新婦そつちのけて盛り上がったことです。本当に縁の深さを思わずにはおれません。さて、乾杯の首領は、この呉の現状で、脳大気に「乾杯」と言うのも気が引けます。そこで「かんぱい」という言葉には四つ意味があり、その中の一つに深く心に感じておられないという意図があります。「この日の喜びを深く感じておられない」「この災害から火宅無常の世界を深く感じておられない」と二つの意味で「カンパイ」でした。

安楽寺マンガ通信

その38 信楽めぐみ作

皆さん、無事でしょうか。最近大阪の地震、広島の大震災、身近な場所での災害が多く、今までのテレビの光景が現実と違って実感してきました。



近年、地球温暖化の影響なのかな？猛暑や大雨や台風など、異常気象がとくも多くなっています。



ついに、猛暑も災害レベルと言われ熱中症もとくも多くなっています。皆さんもしっかりと水分補給を気をつけてください。



また、自然災害は特に避けようがありません。災害が起きた時の対処法に間違いない方が、避難に備えて必需品を揃えたり、リュックを作っている方、今のうちに備えておくことはたくさんあります。

まだ不便な生活が続くと思いますが、今回のこのお祈り、体に気をつけて頑張りましょう。



後悔しない生き方をする

信楽慧

まず、7月の大雨にて被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。皆様が一日でも早く普通の生活に戻れるよう願っております。

この度の大雨では、広島・岡山・愛媛など西日本を中心に記録的な大雨により死者・行方不明者の方が200人を超えました。

今までも災害のニュースを見て心を痛めることはありましたが、今回の災害はいつもと違い特に心を痛め心配いたしました。それは、被災地が地元であり、家族や私が知っている方々が被災されたからです。そういった意味で、今回の災害は私にとって他人事ではなく、特別に身近に感じた災害となりました。

その中で私は人の命はこうまでも簡単に失われてしまうのか、ということをお他人事ではなく身近に感じました。人はいつか死ぬとは頭ではわかっているが、これは本当にとても怖いことだと感じました。

そこで、よく聞かれる言葉だとは思いますが「いつ死んでも後悔しない生き方をする」ということが頭に浮かびました。ただ、これは自分がどう生きるかのみに関わるものではなく、自分と繋がりのある方とどう普段から接するかということもあります。というのも、誰かの「死に目に会える、会えない」ということがあります。自分が死ぬ時に最後話しておきたかったと自分が後悔することがあると思いますが、その逆、他の人も私と最後に話しておきたかったと思われる方も絶対にいるのです。

そう考えた時に、自分の生き方を正すのと同時に、自分と繋がりのある方と普段からどのよう

に接していくか、これは後悔しない生き方を考える上で重要なことではないかと思いました。



中国の浄土教の先達である善導大師は、念仏の道について、まず何よりも「清浄願往生心」が大切であると説かれております。この「清浄願往生心」とは、ただひと筋に浄土往生を願いつける心のことであつて、このような「願いの心に支えられてこそ、よくまことの信心をうることができるといふのです。かくして真宗では、ひとえに浄土を願うという、ただひ

お念佛のしずく



と筋の「願いの大切さを教えております。すなわち、煩惱にまみれ、さまざまな苦悩のつきることのない、この日々の生活において、ただひたすらに、心深く阿弥陀仏を思い、その浄土を願って生きよというのです。浄土こそ、自分のついに帰るべき生命のふる里ぞと思いと、この浄土を願ひ、浄土をめざして生きつづけよと教えるのです。『この道をゆく』

安楽寺法要案内

九月	聴石忌彼岸会	日時 9月22日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 福岡 明願寺 久保山 教善 先生 講題 信不具足の金言~得者を得ず~
十月	顕真永代経	日時 10月20日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 岐阜・願誓寺 船橋 哲成 先生 講題 「信心の歌を味わう」 ~続・信楽峻鷹先生の教えを生きる
十一月	報恩講	日時 11月18日(日) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 畑賀 品秀寺 柳父 正道 先生
十二月	成道会	日時 12月8日(土) 朝席10:00~ 昼席13:00~ 講師 備後 善正寺 那須 英信 先生 講題 往生浄土

います。これは脱水症だと説明されています。それは体内の水分が減った状態で、それで死に至るのです。火とは体温のことです。私たちの身体には三十六度前後の体温があります。どこに熱源があるのでしようか。不思議です。極寒の地へ行っても、灼熱の地に行っても、私の三六度程の体温は維持されます。上がっても下がっても死に至るわけですが、その丁度よい体温はどこで維持しているのでしょうか。

最後は風です。風とは呼吸です。私たちは息のしかたを教えられたわけではありません。しかし生まれたときから自分で呼吸しています。習うこともなく、自ら意識することなく、私の身体の中には風が入りしています。これらが私の身体を形づくっていると仏教では考え、それを「借りもの」と一休さんは表現します。借りものを返すときが私の死です。死んだものは「土にかえる」のです。亡くなったものの「死に水を取る」のです。死ぬと「冷たくなる」のです。そして、私の中の風はなくなり「息

をひきとる」のです。自然に恵まれて生きていく命ですが、いずれ「息をひきとり」「冷たく」なつて、「死に水」を取つてもらい、「土にかえる」のです。私の地水火風は全て自然に返つていくのです。



しかし一休さんはそれだけでは終わりません。五番目の空を語り、その空に帰るといわれます。空とは「色即是空、空即是色」と般若心経

にありますが、私たちの言葉で言えば「縁起」です。縁起とは縁によつて生じ、縁によつて滅するといふ仏教の根本原理です。私たちは有るか無いかの二元論でものを考えます。生は有ると考え、死は無いと考えますが、そのどちらでもなく、全ては縁により、生成し、消滅するものです。親鸞聖人は「悉能摧破有無見」と正信偈にお示し下さいました。有るでもない無いでもない、有無の邪見を打ち破る、まことの仏教をお勧め下さいませ。

「自然」といふは、「自」は、おのづからといふ、行者のはからひにあらざり、自然の働きの自然と表されます。この体かひにてあるがゆゑに。」と仏さまは自然に返すけれども、この私は、自然の仏さまの働きによつて、自然の浄土に迎へとつて下さるというのです。続いて「弥陀仏は自然のやうをしらせん料なり」と阿弥陀様はその自然と言われる仏の働きを知らせるためのもの、とまで言われるのですから、これは私たちにとつてとても大切なことです。

雨が降れば降つたで人は死に、照れば照つたで人は死にます。地水火風は今私を生かしてくれていますが、縁によれば、災いの元となります。いずれにしても人は死ぬのです。自然から離れているように思つても、また自然に返つて行くのです。私が自然の一部であることを自覚するとき、自然へのまなざしは変わってきます。自然が汚れることは、私が汚れることです。自然が病むことは、私が病むことです。「草木国土悉皆成仏」とはそのことを表し、私だけが成仏すればいい話ではありません。自然の本来の姿をしり、そこに届く自然の仏の働きにめざめることが、この度人間に生まれ、お念仏に出会えた意味です。なぜなら、阿弥陀仏は、この自然を知らせに來られたのですから。